

Title	私の読書と図書館
Author(s)	安井, 郁子
Citation	静脩 (1964), 1(2): 3-3
Issue Date	1964-11
URL	http://hdl.handle.net/2433/36221
Right	
Type	Article
Textversion	publisher

問題が検討されてきた。

しかし、さらに大学図書館の近代化をおし進めるため、ドキュメンテーション研究連絡委員会のほかに、長期研究計画調査委員会を始め、5つの常置ならびに特別委員会から、1人ずつ委員が出て、委員会連絡会議付置の「国立大学附属図書館に関する小委員会」（委員長北川敏男九大図書館長）が設けられた。この小委員会で、大学図書館の近代化のための基本構想が検討され、そこでまとめられた要綱が10月28日から開催された第42回の学術会議総会に、ドキュメンテーション研究連絡委員会ほか5つの委員会の連合提案として提出され、総会第2日目の39日に採択された。したがって総会后、大学図書館の近代化に対する勧告が、学術会議より正式に政府に提出されることになる。

私の読書と図書館

安井 郁子

苦しかった試験もやっと終りほっと一息ついたところである。これからしばらくは勝手に本が読めることがうれしい。なんでもいいから、むちゃくちゃに読んでやろうと思う。大学にはいったものの、本は読んでないし、なにもしないで、ひどい劣等感を持っていたが、そういう時いつも図書館へ行った。教養部図書室では自由に本がさわれないので不便だが、中央図書館では、特に閲覧室の中に開架図書室が移ってから、多くの本を手にとって見ることができるようになり、1回生のおわりぐらいからよく中央図書館へ行くようになった。

自分が失望してなんの気力もないような時や、勉強に疲れた時は、本棚のあいだをあちこち散歩する。ここにこんな本がある、これはおもしろそうだななどと思いながら、歩きまわっているうちに、多少なりとも心が満ちてくる。一生かかっても読めないことがわかっていても、なんとなくこの大きな知識のかたまりを全部吸収できるような気がしてくるのである。文学全集なるものを、今まで全然読んでいなかったが、友達の影響で、大学にはいつからゆっく

り読みだした。長編になると、始めの読もう読もうという気持が中頃でなくなり、早く終ればいいと思うようになってしまい、結局は筋しか読まないことになるのだが、それでも何か得たような気がしてくる。教養の1年の内に得たもののひとつに小説の味わいはいる。自分の読書範囲は狭く、自分の進む方面以外のものはほとんど読めない。いわゆる古典と名づけられているもの、その内でも哲学書にあこがれるのだが、自分1人でそれを読んでいくだけの力がまだできていない。広い閲覧室でそういう本を一心に読んでいる人をみると、もっともっと勉強しなくてはとつくづく思う。

私にとっては図書館は、知識欲をかきたてられ、そしてそれを満たしていくことのできる場所である。図書館がもっと良くなるために、図書館に対する要望を書こうと思ったが、今のところすぐ実現できそうなものはあまりない。

場所の狭いこと（特に教養部図書室）、暗い感じがすること、冬の暖房のやり方と換気のこと。教養部図書室は本が少ない。そして中央図書館でも、実際自分のほしい本が少ないこと。開館時間については、日曜日もあけてほしいし、また土曜日の閉館時刻を8時までにしてほしいなどがある。しかし私達利用者も、雑談をやめ、本をていねいに扱って、お互いにより良い図書館を作るように協力しなくてはならないと思う。（医学部2回生）